近世の女性文学をどうとらえるか

鈴木よね子

近世の女性文学を読み始めてから、すでに何年かが経つ。初めのうちは専門について尋ねられると困惑した。近世の女性文学を学んでいると答えると、しばしば相手のとまどいが伝わって来て、言葉に詰まることがあったからである。

しかしながら、もちろんそれは私の側の問題であった。近世の女性文学を読む意義はどこにあるか、実のところ、私自身にも説明のしようがなかった。それどころか、これほどマイナーな分野が他にあるだろうか、これらのどこに文学的価値があるのだろう、という疑問を反芻しながら読むことの方が多かった。

そういう思いは今でも払拭しきれたわけではない。むしろ、根本の問題として研究の基本になっていると思う。そこからスタートし、今でもそこに立ち戻りつつ読まざるを得ない。

現在、女性文学の研究状況は、近代文学・現代文学の分野で活況を呈し、作品の読みの大きな見直しがおこなわれているようだ。女性文学の本質を語る本も出版されている。そこでは女が書いたという点があげつらわれたり、女性による文学の復権が語られているわけではない。「女性文学」という言葉に象徴されるように、女性の書いたものの表現の領域に踏み込んだ議論がなされているのである。悦ばしいことである。

その中で私が最も引き付けられたのは、「自己語り」（『フェミニズムの彼方――女性表現の深層』一九九一年、講談社）という水田宗子氏の提示したキーワードである。欧米の近現代文学を研究する水田氏は、女性の自伝が内面の探求を行なうものだとする。自伝の歴史は自己探求の様式として欧米では長く続いたものだが、小説にしだいに座を奪われ形骸化していった。だが、女性が社会におけるジェンダーを意識しながら自伝を書き始めるようになると、自分は何者であるかというアイデンティティーの問題を幾重にもはらんだ危機の文学になっていったわけである。

この「自己語り」ということを考えさせられるものが日本の近世にもある。

宝暦から文政年間にかけて、つまり十八世紀後半から十九世紀初めに生きて書いた、只野真葛という女性の著作である。見聞録『むかしばなし』は、全六巻という長いものであるが、その中で彼女は繰り返し自己の出自を武士と強調する。そして、他家に嫁いだ女な

がらも、実家を再興しようと心に誓う。歌文集『真葛がはら』には、そういった自己実現を求める姿が綴られている。このような自己実現の欲求は、現実社会の中では一笑に付されるものである。それどころか、彼女自身にさえ正体のつかめない衝動である。その衝動を幻聴などを交えながら内面のドラマとして表現する。その結果、鏡に移し出された自己像は、一方では、社会の中で無意識のうちに抑圧されている女としての無力な自己であり、もう一方では、それを抜け出ようともがきながら社会の女性に対する意識に闘いをいどむ孤立無援の一人の人間である。その両方の姿を真葛は、評論『独考』の中で確認している。

これまで真葛は、抑圧されたジェンダーとして日本で初めて発言した女性とされてきた。最近も北田幸恵氏が「真葛から紫琴へ――性差と表現」(『日本文学』一九九四年十一月号)の中で、近代女性文学の視点から、真葛について明解に解説された。その背景には、女性の地位向上の歴史と平行して語られている社会的発言の系譜がある。

だが、近世文学の立場からすると、事はそうすっきりとはいかない。とりあえず真葛の語る自己像における一種の矛盾をどう解決したらよいのだろうか。このことが改めて問題として照らし出される気がする。

この不可解で矛盾する点は、表現における統一性の欠如によるものと考えるべきではない。むしろ、近世期における表現の特色であると思う。自我による合理化を免れ、矛盾し分裂する自己の姿が無解決のまま提示された表現のしかたである。その中には幻想的な出来事、非日常的な感覚が日常生活の記述と同時に再現されている。

自己語りについてもう一つ触れたい。フィリップ・ルジュンヌ氏の「自伝契約」(中川久定氏『自伝の文学――ルソーとスタンダール』一九七九年、岩波新書参照)によれば、自伝はジャンルとしてあるというよりも、自己を語るという意識の表れた言説でもある。その有無が自伝であるかどうかの標識である。真葛の著作は、見聞録・和歌・評論・説話(世間話)などであり、ほとんどがノンフィクションである。しかも、『むかしばなし』や『真葛がはら』には、自分自身を語るという意識が濃厚に表れていて、著作全体を一種の自伝文学と見なすことができる。

このことはまた、近世の女性の書き物の多くに適用できるのではないかと思っている。近世の女性文学には小説よりも和文や和歌、身辺雑記が非常に多い。『おあん物語』『おきく物語』のように、実際に女性によって語られた経緯をもつものもある。また、近世中期以降の国学の盛行にともなう女性の和歌・和文の創作も気になる。

中古から中世においては自照性の濃厚な日記文学の中で、女性の自己探求と独自の表現が行われていった。封建社会においても、与えられた生活の繰り返しの中で、自己の見聞を折り交ぜて物を語り、書く中で、ひそかに自己探求の深まりが進行していたとしたらどうだろうか。そういう枠組みで一度、近世の女性文学の総体を見直したいと思っている。